

家庭における食育とは ——親と子どもの調理態度の関係について

松島 悦子

(お茶の水女子大学・横浜国立大学 非常勤講師)

1. 問題意識と目的

近年、食育の一環として子どもの調理参加が注目され、子ども料理教室や親子料理教室などが、自治体や企業、NPOなどにより盛んに行われている。料理は、生きるためのスキルであるとともに文化的な色彩も強く、子どもの習いごとの一つとして確立されつつある。

食育基本法（2005年施行）によると、食育（食教育）の目的は、「さまざまな経験を通じて食に関する知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てること」であり、そうした食生活の実践を通じて生きる力を身につけることを目標としている。特に、子どもに対する食育、および、家庭での食育が強調され、同法第5条では、学校や保育所などの役割とともに、保護者の役割について「家庭が食育の重要な役割を有していることを認識し」、「積極的に活動しなければならない」と明記されている（内閣府 2006: 121）。

そもそも子どもの基礎的な食生活習慣の形成や、食事に関わる躰、食事作りの手伝いなどは、家庭における社会化の領域に含まれるものであり、法律への明文化はなぜ必要なのだろうか。

本田（2008: 13）は、1990年代後半以降の日本社会においては、「社会化」に重点を置く政策動向と、「選抜」に重点を置く社会的関心が、いずれも「家庭教育」の重要性を声高に語るようになっていると指摘する。すなわち、子どもや若者の「社会化」の主体としての家庭・親の責任が政策

的に重視されると同時に、子どもの「選抜」に対する社会的関心が、1980年代以前におけるような「受験学力」的な知的能力に特化したものから、従来であれば、「社会化」の領域に属していた、いわゆる「人間力」的なものまで幅広く含む方向へと変化しつつあるという。

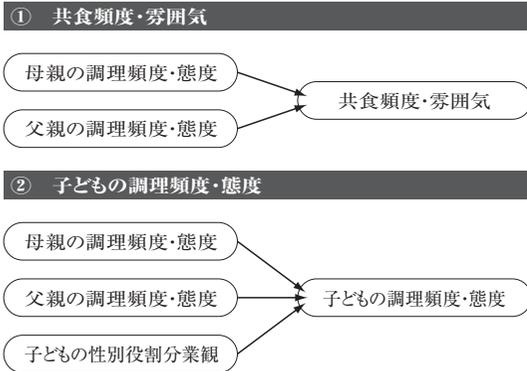
子ども料理教室が活況を呈し、家庭での食育が法律として明文化される背景には、こうした流れが少なからずあるためといえるだろう。

しかし、食育が明文化される一方で、食育の定義が食育基本法に明記されていないことが混乱を招く一因ともなっている。『『食育』という言葉は用いる人によって意味合いが様々で、統一的な定義はなされていない』（河野 2007）ため、営利目的の活動であっても「食育」というベールをかぶせれば社会貢献活動に変換される。「食育」という概念が意図的に広げられているように感じられる。

幼稚園児、小学生あるいは中学生の子どもを持つ母親たちに調査をしてみると、9割以上が食育に関心を持ち、家庭での食育は大切であると答えた。しかし、何をしたらよいかわからないという人は36%、食育をすることを負担に思うという人も約10%と少なからずいるのである（松島 2009）。家庭における食育の重要性について異論をはさむ余地はなく、何かしなければならぬとは思っているものの、実際家庭で何をしたらよいか分かりにくい。

そこで、本論では、食育の重要な領域の一つである調理を取り上げ、家庭における食育のあり方について検討を試みる。自力で調理ができること

図表-1 分析の枠組み



は、食の自立を図り、生きる力を身につける重要な要因の一つである。家庭における食育は、普段の生活の中で親との相互作用を通じた社会化の過程で行われるものである。調理に対する子どもの意識や態度は、毎日の家庭生活のなかで育まれるものであり、調理をする親の姿からも影響を受けると考える。そうした親の姿は、子どもにとっての食事の楽しさにも影響を与えるものと考えられる。

具体的には、「親の調理態度」が「子どもの調理態度」と「共食の雰囲気」にどのように影響を与えるかについて明らかにし、家庭における食育の一つの方向性を提示することを目的とする（図表-1）。

2. 先行研究

家庭の食育に関する家族関係の研究をみると、幼児や児童に注目した母子関係の研究が多い（山口ほか 1996; 富岡 1998; 伊藤ほか 1993など）。これらの研究では、食教育には母親の意識が大きな影響を与え、母親の食生活に対する積極的な意識や態度は、子どもの好ましい食態度の形成に影響を与えるという結果が提示されている。子どもに食事の手伝いをさせることは、食卓への愛着につながり、子どもの食事満足度を高めることが明らかとなっている。また、自立や人間尊重を身につけることを重視する母親は、子どもに炊事や食事の前後の手伝いをさせているという報告もある

（内閣総理大臣官房広報室編 1990）。

一方、父親については、富岡（1999）が、幼児の父親と母親に対する調査を行っており、父親が食べることに関心を持ち、家族とともに食卓に着き、家族団らんの場として楽しい雰囲気作りに努力する態度を持つ場合、そのような態度は、母親の食生活や食教育に対する肯定的、積極的な意識や行動と関連することを明らかにした。しかし父親自身の食事作りという実践行動につながるかについては、有意な相関はみられなかった。

また、共食に関する親子関係・家族関係の研究は多い（表 1991; 川崎 2001; 平井・岡本 2006, 2005; 小西・黒川 2000; 黒川・小西 1997）。これらの研究では、家族のまとまりや子どもの心の健康に対して、食事中の会話によるコミュニケーションが重要であることが指摘されている。

子どもの調理参加については、筆者が東京圏在住の中学生と高校生を対象とした調査を行っている。包丁とコンロを使って家で調理をよくする、あるいは時々するという中高生は44.6%であり、作る頻度は「月1～2回」程度であるが、調理をして「大変楽しかった」あるいは「まあ楽しかった」という子どもは全体の9割だった。家で調理をよくする・時々するという子どもは、あまりしない・全くしないという子どもに比べて、食事中家族とよく会話をする傾向があった。さらに、子どもは調理に工夫をこらしたり、チャレンジしたり、人に食べてもらったりすることでさまざまな感動や喜びを味わっており、こうした体験を積むことによって食に対する関心を高めていくものと考えられる（松島 2001）。

東京圏に住む4歳から小学校6年生までの子どもを持つ母親を対象とした調査では、子どもが調理をするようになって一番変化したことは「食事中の会話が増える」、次が「食事が進む」ことであり（大久保 1998: 13）、子どもの調理参加は食事中の会話を促進させる要因であった。

また、中高生で調理をよくする・時々するという人は、あまりしない・全くしないという人に比べて父親が調理をする割合が高く、この傾向は特に男子で顕著だった（松島 2001）。父親の調理が

図表-2 設問項目

設問項目	選択肢
■子どもの調理頻度 「子どもの調理頻度」	ほぼ毎日(=6.0)、週3~4日(=3.5)、週1~2日(=1.5)、月1~2日(=0.38)、半年に1~2日(=0)、年に1~2日(=0)、しない(=0)
■子どもの調理態度(合成変数) 「食事作りの手伝いをよくするか」 「料理をすることは楽しいか」 「家族はあなたの作る料理を褒めてくれるか」	そう思う(=4)、まあそう思う(=3)、あまりそう思わない(=2)、全くそう思わない(=1)
■母親、および父親の調理頻度 「母の夕食調理頻度」 「父の夕食調理頻度」	ほぼ毎日(=6.0)、週3~4日(=3.5)、週1~2日(=1.5)、月1~2日(=0.38)、月1日未満(=0)、しない(=0)
■母親、および父親の調理態度(合成変数) 「できるだけ自分で作ろうと努力しているか」 「料理をしているとき楽しそうか」 「料理を上手に作るか」	そう思う(=4)、まあそう思う(=3)、あまりそう思わない(=2)、全くそう思わない(=1)
■共食頻度 「夕食の共食頻度」	ほぼ毎日(=6.0)、週3~4日(=3.5)、週1~2日(=1.5)、月1~2日(=0.38)、ほとんどしない(=0)
■共食の雰囲気(合成変数) 「食事中家族とよく話すか」 「食事中の家族との会話は楽しいか」	そう思う(=4)、まあそう思う(=3)、あまりそう思わない(=2)、全くそう思わない(=1)
■性別役割分業観(合成変数) 「男性は外で働き女性は家庭を守るべきだ」 「食事作りは女性がした方がいい」	そう思う(=4)、まあそう思う(=3)、あまりそう思わない(=2)、全くそう思わない(=1)
■調理役割の平等意識(合成変数) 「男性も料理をした方がいい」 「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」	そう思う(=4)、まあそう思う(=3)、あまりそう思わない(=2)、全くそう思わない(=1)

子どもの調理参加の促進要因となることを示唆するものといえる。

以上の先行研究より、母親の積極的な食意識・態度は、子どもの家族の共食への愛着や調理参加、充実した食事への関心と関係することが明らかとなっている。しかし、調理に関しては要因の関係性は明らかにされておらず、また、父親の調理意識・態度についてはあまり検討されてこなかった。

子育てに関しては、父親のかかわりが子どもによい影響を与えていることが明らかとなっている(石井クンツ 2007)。すなわち、子どもが父親と接触することで人間関係の多様性を学び、生活範囲の広がりから社会性が増加する。さらに父親が母親のストレスを軽減させることで間接的に子どもによい影響を与えることなどがあげられる。食事作りの面においても同様に、父親のかかわりが子どもによい影響を与えることは十分に考えられる。

本研究では調査対象として中学生を選んだ。理由は、この年代の子どもは、親に依存的であり、

食生活において親の影響を受けている一方で、親の意識や行動について客観的に評価できると考えるためである。また、中学生は身体的だけでなく、精神的に子どもから大人へ移行する時期であり、性役割意識が形成されつつあるときでもある。調理に関しては、多くの家庭で女性が担っているのが現状であるが、子どもの性役割意識が調理への姿勢にどのような影響を与えているかについても明らかにしたいと考える。

調理とは、狭義には、食べられない、あるいは食べにくいものを、食べやすいおいしいものに変換することであり、広義にはこれに関連する一連の工程が含まれる(島田 1999)。本論では、子どもが主体的に食事を作ろうとする積極性について検討するため、調理の中核をなす「包丁で切る」、「コンロで加熱する」という行動に着目した。「家族の共食」は、時間と場所を共有して家族が揃って食事をするものと定義した。

3. 方法

(1) 調査概要

調査概要と分析対象としたデータは次のとおりである。

- ・調査時期：2007年7～9月
- ・調査対象者：協力を得られた、東京都内にあるA中学校の生徒399名（回収率65.4%）を対象とした。
- ・方法：質問紙による調査（教室で配布し、郵送にて回収）
- ・分析対象：本論の分析対象として、両親と同居し、かつ「家で主に料理をしている人は母親」と答えた個票データ227件を用いた。
- ・保護者にも同様な調査を行ったが、子どもと保護者の揃ったデータの数が限られ、連結データファイルで重回帰分析をするに至らなかった。連結データに関しては、相関分析にのみ使用した。

(2) 分析対象者の主な特徴

- ・男子が29.6%、女子が70.4%で、女子の割合が高い。学年は1年生が30.4%、2年生が29.5%、3年生が40.1%である。
- ・家族人数は、3人が25.2%、4人が51.3%、5人が16.8%、6人以上が5.8%である。祖父母との同居率は12.3%、兄弟姉妹がいる人は74.7%である。
- ・母親の就業状況は、専業主婦が44.9%、自営・自由業が9.8%、フルタイム就業雇用者が12.4%、パートタイムが28.9%、アルバイト・その他が40%で、専業主婦の割合が高い。
- ・本データ特性として、中学生全体のデータは女子に偏るため、分析は男女別に行った。

(3) 変数

分析に用いる変数は、図表-2に示した。各変数には、程度が大きいほど点数が高くなるように得点を与え、「子どもの調理態度」「母親の調理態度」「父親の調理態度」および「共食の雰囲気

の4変数は、該当する変数の得点を合計した。これらの合成変数の信頼性係数 α は、順に0.803、0.614、0.841、0.816である。調理頻度および共食頻度については、実際の頻度を反映するため、1週間に行う回数として、「ほぼ毎日」は6.0、「週3～4日」は3.5、「週1～2日」は1.5、「月1～2日」は0.38、「月1回未満」および「ほとんどしない」は0の得点を与えた。各変数の記述統計量は、図表-3に示した。

「子どもの調理頻度」とは、包丁とコンロを使って家で料理をする頻度のことである。「調理態度」とは、料理に取り組む積極的な姿勢のことを意味し、親の場合は子どもから見た親の態度である。共食の雰囲気は、食卓での会話に関わるものである。「性別役割分業観」については、合成変数を作成するため、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」、「食事作りは女性がした方がいい」、「男性も料理をした方がいい」、「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」の4項目について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。初めの2項目と次の2項目による2因子が抽出され、信頼性係数 α は、それぞれ0.749、0.702だった。2つの別の合成変数を作成し、最初の2項目の得点を合計した変数を「性別役割分業観」、次の2項目による変数を「調理役割の平等意識」と命名した。両者はマイナスの相関（ $r = -0.232^{**}$ ）があるため、重回帰分析には「性別役割分業観」で代表させることとした。

4. 結果

(1) 家庭での調理と共食の実態

中学生がいる家庭における、子どもの調理と子どもからみた親の調理、家族の共食について実態を把握した。

(a) 子どもの調理実態

食事作りの手伝いをよくする（「そう思う」あるいは「まあそう思う」という中学生の割合は44.9%で、男女別では女子が48.4%、男子が35.4%で、女子の方がやや高い（ $p < 0.1$ ）。全体の54.0%

図表-3 変数の記述統計量

	ケース数	平均値	標準偏差	最小値	最大値
子どもの調理頻度	226	0.648	1.079	0.00	6.00
子どもの料理態度(合成変数) *1	226	8.894	1.897	3	12
食事作りの手伝いをよくするか	227	2.361	0.810	1	4
料理をすることは楽しいか	226	3.265	0.712	1	4
家族はあなたの作る料理を褒めてくれるか	226	3.265	0.712	1	4
母親の調理頻度	223	5.825	0.781	0.38	6.00
母親の料理態度(合成変数) *2	226	10.000	1.543	3	12
あなたから見て母は料理を上手に作るか	227	3.608	0.573	1	4
母は料理しているとき楽しそうか	227	2.855	0.799	1	4
母はできるだけ自分で料理を作ろうと努力しているか	226	3.522	0.681	1	4
父親の調理頻度	189	0.372	0.687	0.00	3.50
父親の料理態度(合成変数) *3	195	7.287	2.736	3	12
あなたから見て父は料理を上手に作るか	197	2.523	1.048	1	4
父は料理しているとき楽しそうか	195	2.641	1.081	1	4
父はできるだけ自分で料理を作ろうと努力しているか	198	2.091	1.019	1	4
夕食の共食頻度	225	3.111	2.098	0.00	6.00
共食の雰囲気(合成変数) *4	227	6.449	1.370	2	8
食事中あなたは家族とよく話すか	227	3.238	0.762	1	4
食事中の家族との会話は楽しいか	227	3.211	0.728	1	4
性別役割分業観(合成変数) *5	225	4.547	1.523	2	8
男性は外で働き女性は家庭を守るべきだ	226	2.146	0.838	1	4
食事作りは女性がした方がいい	226	2.412	0.871	1	4
調理役割の平等意識(合成変数) *6	225	6.067	1.430	2	8
男性も料理をしたほうがいい	226	3.204	0.756	1	4
子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ	225	2.862	0.868	1	4
学年 *7					
中1	227	0.304	0.461	0	1
中2	227	0.295	0.457	0	1
中3	227	0.401	0.491	0	1
母の仕事 *8					
専業主婦	225	0.449	0.498	0	1
自由・自営業	225	0.098	0.298	0	1
フルタイム	225	0.124	0.331	0	1
パートタイム	225	0.289	0.454	0	1
性別 *9					
男子	223	0.296	0.458	0	1
女子	223	0.704	0.458	0	1

各変数の選択肢、および得点化は図表-2参照

*1~*6は該当する変数の合成変数。*1~*3は下の3変数、*4~*6は下の2変数の得点を合計した

*7~*9は、ダミー変数、はい=1、いいえ=0

が月1日以上家で調理をしており、頻度は「月1~2日」(27.9%)と「月1日未満」(28.8%)が高く、「週1~2日」以上は26.1%だった。頻度は女子の方がやや高い($p < 0.1$)。調理することを楽しい(「そう思う」あるいは「ややそう思う」と感じている中学生の割合は89.8%で、男子で80.0%、女子で93.6%だった($p < 0.01$)。自分の作る料理を家族が褒めてくれる(「そう思う」あるいは「ややそう思う」という子どもの割合は87.8%と

高く、男子で83.1%、女子では90.2%だった。

(b) 子どもから見た親の調理実態

母親が夕食を作る頻度について、「ほぼ毎日」と答えた子どもの割合は94.6%であり、「週3~4日」は3.6%、「週1~2日」以下は1.7%だった。「母親は料理を上手に作るか」という質問に「そう思う」あるいは「まあそう思う」と答えた子どもの割合は96.5%、「母親はできるだけ自分

で料理を作ろうと努力しているか」についても91.2%と高く、母親の調理に対する姿勢を高く評価していた。しかし、「母親は料理をしているとき楽しそう」（「そう思う」あるいは「まあそう思う」）と感じている子どもの割合は68.7%にとどまった。

父親については、夕食を作る人の割合は42.9%で、57.1%が「ほとんどしない」と答えた。作る頻度は「週1～2日」が17.5%で最も高く、続いて「月1～2日」（14.3%）、「月1日未満」（9.5%）が高く、「週3～4日」は1.6%であり、母親に比べると極めて低いレベルだった。父親が料理をするという子どもに、「父親は料理を上手に作るか」、「できるだけ自分で作ろうと努力しているか」、「料理をするとき楽しそうか」という3つの質問をしたところ、肯定的に答えた子どもの割合は、それぞれ87.5%、62.5%、88.8%だった。母親の回答については前述したが、それぞれ96.5%、91.2%、68.7%であり、子どもは、母親は料理上手で、自分で作ろうと努力しているが、父親よりも楽しそうではないと感じていた。以上の、親の調理実態についての子どもの受け止め方は、男女で有意な差は認められなかった。

(c) 家族の共食の実態

夕食での家族の共食頻度は、「週1～2日」が36.4%で最も高く、続いて「ほぼ毎日」（28.9%）、「週3～4日」（23.1%）の順で高い。朝食ではさらに低く、「ほとんどない」が27.8%で最も高く、「週1～2日」が26.9%、「週3～4日」が9.7%、「ほぼ毎日」は23.8%だった。食事中家族とよく話すか、という質問に対し「そう思う」あるいは「まあそう思う」という回答の割合は82.8%、食事中家族との会話が楽しいかという質問については84.6%だった。

以上より、54.0%の中学生が家で調理をしており、その頻度は「月1～2日」程度ではあるが、全体の9割は調理を楽しんでいた。中学生は、母親の調理態度を高く評価していたが、父親よりも楽しそうではないと見ていた。また、夕食の共食

頻度については「週1～2日」という回答が多いが、大多数の中学生が食事中の家族との会話を楽しいと感じていた。

(2) 性別役割分業観について

(a) 子どもの性別役割分業観

「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という性別役割分業観に「そう思う」あるいは「まあそう思う」と回答した中学生の割合は29.2%、「食事作りは女性がした方がいい」という考え方については、41.9%が肯定した。男女別にみると、「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」という考え方に賛成したのは、男子で57.0%、女子で17.9% ($p < 0.001$)、「食事作りは女性がした方がいい」については、男子で63.1%、女子で33.7% ($p < 0.01$) であり、男子の約6割が従来型の性別役割分業観を持っていた。

一方、「男性も料理をした方がいい」あるいは、「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」という考え方については、それぞれ85.8%、68.8%の中学生が賛同し、男性が調理することに多くの中学生が肯定的な意識を持っていた。男女別では、「男性も料理をした方がいい」について賛成したのは、男子で67.7%、女子で93.0% ($p < 0.001$)、「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」については、男子で58.5%、女子で73.7% ($p < 0.05$) であり、女子の方が高いものの男子でも6～7割が男性の調理を肯定した。

中学生においても性別役割分業観は根強いものがあり、特に男子で顕著だった。そうした意識を持ちながらも、調理役割に関しては男女平等意識を持つ中学生は多く、男子でも半数を超えることが明らかになった。

これらの意識について、学年別に男女の比較をした（図表-4）。「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」に肯定した割合は、男子の方が高く、男子では学年が進んでも大きな変動は見られなかった。女子では中3で否定的な考えを持つ子どもが9割になり、男女の差が広がることが明らかとなった。「食事作りは女性がした方がいい」

図表-4 学年別にみた性別役割分業観の男女の違い

	中1		中2		中3		母親†
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	
「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ」	50.0% (6,573)*	19.1%	57.9% (6,242)*	25.5%	51.9% (17,165)***	11.3%	37.9%
「食事づくりは女性がした方がいい」	70.0% (5,651)*	38.3%	n.s.		61.5% (10,440)**	25.4%	33.1%
「男性も料理をした方がいい」	65.0% (7,174)**	91.5%	57.9% (8,470)**	89.4%	76.9% (8,911)**	96.8%	91.3%
「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」	45.0% (3,813)+	70.2%	63.2% (n.s.)	70.2%	65.4% (n.s.)	79.0%	93.4%

()は χ^2 値。* $p<0.05$ 、** $p<0.01$ 、*** $p<0.001$ 、+ $p<0.1$

† 中学生のデータとその母親のデータの連結ファイル(217組)を用いた

についても、同様な傾向がみられた。「男性も料理をした方がいい」と「子どもの時から男の子にも料理をさせるべきだ」という男性の調理については、女子の方が肯定的で、男女とも中1と中2に比べて、中3で賛成の割合が高くなった。上昇率は男子で顕著に高い。

長澤・小笠原(1992)は、中1と中3に対する調査で、家庭生活意識によるグルーピングを行い、中3で性別役割分業観を軸とした男女別意識群の形成が認められたことを明らかにした。男女間の意識差が拡大する前の1年次の家庭科において家庭生活領域を位置づけ、性役割を学習することの重要性を指摘している。

今回の調査対象であるA中学でも、1年次から家庭科で男女共同参画推進の視点を取り入れた授業が行われ、中1で家事全般と消費生活、中2で調理実習を取り入れた食生活、中3で家族・保育・ジェンダーに関する学習が行われていた。今回の調査で、中1と中2に比べて中3で調理役割の平等意識が高くなった結果をみると、家庭科の学習効果が大きいと推察される。

(b) 母親と子どもの性別役割分業観の関係

《母子の連結ファイルより》

中学生の母親の性別役割観などの意識については、母子の連結ファイルを用いた。上述した4項目について「そう思う」あるいは「まあそう思う」と答えた母親の割合(図表-4右端)は、子どもの性別、学年で違いはみられなかった。中学

生と母親の相関をみると、男子ではどの考え方についても有意な相関がみられず、女子では「男性も料理をした方がいい」という考え方のみ母親と弱い相関($r=0.173^*$)が認められた。

以上より、子どもの性別役割分業観と調理役割の平等意識に対し、母親の意識の影響は弱く、特に男子に対しては母親の影響はみられないことが明らかとなった。

(3) 重回帰分析の結果

分析の枠組み(図表-1)に従って、次の①②を目的として重回帰分析を行った。分析には、得点化した変数を用いた。各変数の記述統計量は、図表-3に示した。

- ① 家族の「共食の雰囲気」および「共食頻度」に対する、母親と父親の「調理態度」および「調理頻度」の影響、
- ② 「子どもの調理頻度」および「子どもの調理態度」に対する、母親と父親の「調理態度」および「調理頻度」、「子どもの性別役割分業観」の影響をみる。

分析の前に多重共線性の影響を排除するため、独立変数の相関をみた。その結果、「父親の調理態度」と「父親の調理頻度」の相関のみが大きい(男子 $r=0.458^{**}$ 、女子 $r=0.477^{**}$)、親の「調理態度」と「調理頻度」は別のモデルとして分析を行った。

図表-5 「共食の雰囲気」・「共食頻度」を従属変数にした重回帰分析結果（標準偏回帰係数・ β ）

独立変数	共食の雰囲気		共食頻度	
	男子	女子	男子	女子
母親の調理態度	0.623 ***	0.409 ***	0.377	0.190 *
父親の調理態度	0.213 *	-0.138	-0.058	0.146 +
母親専業主婦ダミー	0.190 +	-0.093	0.036	0.081
母親自由・自営業ダミー	0.264 *	-0.038	-0.031	0.170 +
母親フルタイムダミー	-0.058	-0.153 +	-0.036	0.038
中1ダミー	0.317 *	0.069	0.137	-0.046
中3ダミー	0.135	-0.090	-0.082	-0.194 +
F値	8.163 ***	4.402 ***	1.245	2.528 *
調整済みR ²	0.459	0.156	0.028	0.077
ケース数	59	130	60	129

* $p < 0.05$, *** $p < 0.001$, + $p < 0.1$

図表-6 「子どもの調理態度」を従属変数にした重回帰分析結果（標準偏回帰係数・ β ）

独立変数	子どもの調理態度			
	男子		女子	
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
母親の調理態度	0.134		0.104	
父親の調理態度	0.276 *		0.178 *	
母親の調理頻度		0.205		-0.089
父親の調理頻度		0.173		-0.003
性別役割分業観	-0.277 *	-0.251 +	0.084	0.060
母親専業主婦ダミー	0.242 +	0.252	-0.207 *	-0.190
母親自由・自営業ダミー	0.316 *	0.279 +	0.107	0.088
母親フルタイムダミー	0.217	0.269	-0.217 *	-0.244
中1ダミー	-0.034	-0.075	-0.020	-0.072
中3ダミー	-0.049	-0.111	-0.115	-0.146
F値	2.751 *	1.95 +	2.412 ***	1.586
調整済みR ²	0.197	0.123	0.081	0.035
ケース数	58	55	130	129

* $p < 0.05$, *** $p < 0.001$, + $p < 0.1$

(a) 母親と父親の「調理態度」「調理頻度」と、「共食の雰囲気」との関係（図表-5左側）

「共食の雰囲気」を従属変数とし、母親・父親の「調理態度」と「調理頻度」を独立変数として男女別に重回帰分析を行った。制御変数としては、学年と母親の就業形態を投入した。

「共食の雰囲気」の結果は、図表-5左側に示した。男子については、調整済み決定係数は0.459、係数は「母親の調理態度」が最も大きく、それ以外に「父親の調理態度」、「中1」、母親の職業が「自由・自営業」も、「共食の雰囲気」に有意に影響を与えた。女子については、調整済み決定係数

は0.156で、男子よりも説明力は小さいが、係数は「母親の調理態度」で有意に大きい。

すなわち、女子も男子も、母親の積極的な「調理態度」によって共食での会話が増え、共食が楽しいと感じられるが、男子にとっては母親だけでなく「父親の調理態度」の影響も認められた。

次に、母親と父親の「調理頻度」を独立変数として重回帰分析を行ったが、調整済み決定係数は男子で-0.017、女子で0.009であり、ともにモデルは有意ではなかった（図表は省略）。

(b) 母親と父親の「調理態度」・「調理頻度」と、「共食頻度」との関係 (図表-5右側)

「共食頻度」を従属変数として、「共食の雰囲気」と同様に重回帰分析を行った。その結果を図表-5右側に示した。母親と父親の「調理態度」を独立変数とした場合、男子については、調整済み決定係数が0.028であり、モデルは有意ではなかった。女子については、係数は「母親の調理態度」で有意ではあるが、調整済み決定係数は0.077で、説明力は大きいとはいえない。

さらに、母親と父親の「調理頻度」を独立変数として重回帰分析を行ったが、調整済み決定係数は男子で-0.100、女子で0.033であり、有意な結果は得られなかった (図表は省略)。

(c) 母親と父親の「調理態度」・「調理頻度」および「子どもの性別役割分業観」と、「子どもの調理態度」との関係 (図表-6)

「子どもの調理態度」を従属変数として、母親および父親の「調理態度」と「子どもの性別役割分業観」を独立変数として重回帰分析を行った。制御変数としては、上の (a) の分析と同様、子どもの学年と母親の就業形態を投入した。その結果は、図表-6に示した。

男子 (モデル1) については、調整済み決定係数は0.197、係数は「父親の調理態度」でプラスに、「子どもの性別役割分業観」でマイナスに、それぞれ有意に影響を与えた。女子 (モデル3) については、調整済み決定係数は0.081、係数は「父親の調理態度」でプラスに有意に影響を与えた。すなわち、父親が積極的に調理をする姿勢を見せるほど、男子も女子も「調理態度」が積極的である。また、男子については、「性別役割分業観」が強いほど、「調理態度」が消極的である。

「母親の調理態度」は、「子どもの調理態度」に影響を与えなかったが、就業形態は影響を与えた。男子は、母親が「自由・自営業」の場合にプラス、女子は母親が「専業主婦」あるいは「フルタイム雇用者」の場合にマイナスの影響があった。子どもにとっては母親が調理に対しどのような意識や態度を持つかよりも、どの程度の頻度

で、どんな料理を作ってくれるかのほうが影響が強いのではないかと推察される。

本調査項目の中で母親の就業形態の違いで有意差が認められたのは、夕食を作る頻度であり、母親が「ほぼ毎日」作ると答えた中学生の割合は、「母親が専業主婦」の場合98.0%、「自由・自営業」で90.5%、「フルタイム雇用者」で75.0%、「パートタイム雇用者」で98.5%だった ($p < 0.001$)。今回の重回帰分析の結果を母親の調理頻度で説明することはできない。母親の就業形態と子どもの調理態度の関係の詳細については、今後の課題である。

次に、母親と父親の「調理頻度」を独立変数として重回帰分析をしたが、女子 (モデル4) では調整済み決定係数が0.035でモデルは有意ではなく、また男子 (モデル2) では調整済み決定係数は0.123だが、係数はいずれも有意ではなかった。「子どもの調理態度」には、親の「調理頻度」以外の要因が関わるといえる。

さらに、「子どもの調理頻度」を従属変数として、「子どもの調理態度」の場合と同様、親の「調理態度」あるいは「調理頻度」を独立変数として重回帰分析を行った。調整済み決定係数はいずれのモデルもマイナスであり、有意ではなかった (図表は省略)。

5. 考察

(1) 「父親の調理態度」だけが、

「子どもの調理態度」に影響を与える

「父親の調理態度」の積極性は、「子どもの調理態度」にプラスの影響を与えることが認められ、「母親の調理態度」については有意な影響は見られなかった。この結果は、家で調理を「よくする」・「時々する」という子どもは、「あまりしない」・「全くしない」という子どもに比べて、父親が調理をする割合が高いという調査結果 (松島 2001) を支持している。

子どもたちが、母親ではなく、「父親の調理態度」の影響を受けたことについて、以前筆者が中高生に対し男女別のグループインタビュー (松島 2001) を行った結果を手掛かりに考察したい。男

子の場合、父親が調理をよくするという子どもほど、「自分も調理をした方がいい」という考え方をもち、炒め物や揚げ物など父親がするのと同じような調理に取り組んでいた。しかし、父親が全く調理をしないという男子は、空腹になっても何もせず、母親の帰りを待っていると述べていた。また女子で、「気がつく父親がキッチンに立って何か作っている」という子は、「調理は母親だけがするものではなく、家族の皆が作れて当たり前」と考えていた。

この結果より、毎日の食事作りの役割が母親に固定化されている場合、子どもは、食事作りは「母親がするもの」という意識を持つ。母親の調理態度が積極的であれば、食卓の雰囲気は良くなるものの、自分もやってみようという気持ちには結びつかない。しかし、父親も食事作りに関与して母親に調理役割が固定化されていない場合、子どもは、「調理は母親だけがするものではない」という意識を持つと推察される。頻度は高くなくても、父親が調理を積極的にする姿勢を見せる場合は、母親だけでなく家族一人ひとりがするのが当たり前であるという規範が家族の中に醸成され、食の自意識や調理役割の平等観が家族に形成されるのではないかと考えられる。

また、子どもが父親と同じように調理をしようとするのは、楽しそうに調理をする父親の姿に共感し、自己同一性形成の過程で父親をリーダーシップのモデルとして認めているためではないかと考える。

近年男性で調理をする人の割合が増加しており、2005年の東京圏の調査では、20歳以上の男性で料理をする人の割合はどの年代でも50%を超えている（松島 2006）。調理役割に関する平等意識が高まっていくことが期待される。

(2) 親が調理をする姿を見せることも、 食の自立への重要な一歩

子どもは、家庭での社会化の過程で親の生活する姿を見て育つが、今回の分析結果から、親が子どものために調理をする姿からも、子どもは親の意図以上に多くのものを受け取っていると見える。

池田（2000）は2者間の関係に重点を置くコミュニケーション論を展開している。コミュニケーションには主たる目標があると仮定し、コミュニケーションを、その基盤となる目標に着目して「説得達成の相」「リアリティ形成の相」「情報環境形成の相」の3つの側面で説明している。「説得達成の相」は、受け手に影響を与えることを目標とするもので、親子関係においては躰など親の養育態度に代表される。「リアリティ形成の相」は経験や感情、知識などを共有しようとするもので、「とりとめもない会話」といった社会的な関係を目標とするものも含まれる。「情報環境形成の相」は目標に付随して態度や話し方から非意図的に「伝わってしまう」部分に注目したコミュニケーションであり、前述した2つのコミュニケーションも含まれる。親子が日常的な相互の交わりの中で、意図的にまたは情報の副産物として形成される雰囲気から感じ取ったものであると説明される。

家族が食事を共にすることは、時間と空間と行為を共有することに意味がある「リアリティ形成の相」に含まれ、親の調理をする姿は、非目標的な「情報環境形成の相」に含まれると考える。これら2つのコミュニケーションは、毎日の生活の中で繰り返し行われるものであり、家庭の中でこそ成立しやすい。

おいしい料理を作ろうと努力している親の姿や楽しそうに作る親の姿は、言葉で伝える以上に子どもの共感を得られるのかもしれない。家庭での食育は、食の自立を図り、生きる力を身につけるうえで重要な役割を果たすものであり、親との相互作用を通じた社会化の過程がその実現に不可欠である。こうした親の姿を見せることも本来の食育のあり方のひとつではないかと考える。

(3) 親の「調理態度」だけでは、 「共食頻度」は変えられない

母親または父親の「調理態度」の積極性は、「共食の雰囲気」を楽しくするが、「共食頻度」にはあまり影響を与えなかったことについて、ここで考察しておきたい。先行研究でも、頻度よりも、共食の雰囲気の良さが子どもの心理や家族の

まとまりに重要であると指摘されている(表 1991; 黒川・小西 1997; 川崎 2001 ほか)。本調査では、多くの家庭で家族が揃って夕食をとる頻度は「週 1~2日」程度であり、休日などに限られていた。中学生のいる家庭は、家族の個人化が進むライフステージにあり、中学生自身も塾通いや部活、友人との付き合いなど個人としての生活領域を広げている。また、母親も父親も働き盛りである。中学生の25.6%が週 1日以上「夕食を一人で食べることがある」と答えており、その割合は、学年が進むほど増えていた(1年13.0%、2年19.9%、3年39.4%) ($p < 0.05$)。中学生の生活時間(NHK国民生活時間調査 2005年)をみると、学校や勉強のために拘束される時間は平日 9時間 8分と長い。通学時間を含めると約10時間となる。中学生の親の年代である40代の労働時間をみると、男性では仕事時間と通勤時間を合わせて1日平均10時間24分、女性では5時間12分であり、長時間労働は家族の生活時間のずれにも関わる深刻な問題である。共食頻度を高めるためには、食生活の面だけでなく、働き方なども含めた生活全体の見直しが必要である。

都道府県が策定する食育推進計画では、12都道府県で家族の共食頻度を高める数値目標が設定されているが(内閣府 2007: 92-93)、共食頻度を高めることは一家族の努力で解決できる問題ではない。なぜなら、社会全体におけるワーク・ライフ・バランスのあり方と合わせて論じられるべき課題だからである。

6. まとめと今後の課題

中学生を対象として調査分析した結果、母親および父親の「調理態度」が積極的なほど、家族の「共食の雰囲気」が楽しくなり、特に「父親の調理態度」が積極的なほど、「子どもの調理態度」も積極的になることが確かめられた。

食の自立意識や調理役割の平等観を家族内に形成するためにも、父親が調理に対する積極的な態度をいかに子どもに伝えるかがカギを握るといえる。

なお、本論では親の調理態度として子どもの主観による変数を用いたが、本来は父親と母親に対する調査から得たものを採用することが必要である。また、母親と父親の調理頻度が子どもに及ぼす影響をより明確にするためには、頻度の指標を再検討する必要がある、これらについては今後の課題である。

文献

- 池田謙一, 2000, 『コミュニケーション 社会科学の理論とモデル5』東京大学出版会。
- 石井クンツ昌子, 2007, 「父親と青少年期の子どもの発達——父親は子どもの社会性にどのような影響を与えているのか」耳塚寛明・牧野カツコ編『閉ざされた大人への道——学力とトランジションの危機』金子書房, 125-142。
- 伊藤至乃・天野幸子・殿塚婦美子, 1993, 「食生活における母子のかかわりについての研究」『栄養学雑誌』51(1): 39-52。
- NHK放送文化研究所, 2006, 『日本人の生活時間・2005——NHK国民生活時間調査』日本放送出版協会。
- 大久保憲香, 1998, 『キッズクッキングの実態調査』東京ガス都市生活研究所。
- 表真美, 1991, 「共働き家庭の食生活と家族関係」『家族関係学』10: 82-91。
- 川崎末美, 2001, 「食事の質、共食頻度、および食卓の雰囲気」が中学生の心の健康に及ぼす影響」『日本家政学会誌』52(10): 923-935。
- 黒川衣代・小西史子, 1997, 「食事シーンから見た家族凝集性——中学生を対象として」『家族関係学』16: 51-63。
- 河野公子, 2007, 「食育」『日本食品科学工学会誌』54(4): 204。
- 小西史子・黒川衣代, 2000, 「親子のコミュニケーションが中学生の『心の健康度』に及ぼす影響」『日本家政学会誌』51(4): 273-286。
- 島田淳子, 1999, 「調理の文化的考察」杉田浩一編『講座食の文化 第3巻 調理とたべもの』(財)味の素食の文化センター, 27-47。
- 富岡文枝, 1998, 「母親の食意識及び態度が子どもの食行動に与える影響」『栄養学雑誌』56(1): 19-32。
- , 1999, 「幼児への食教育と両親の食意識及び食行動との関わり」『栄養学雑誌』57(1): 25-36。
- 内閣府, 2006, 『平成18年版食育白書』社団法人時事画報社。
- , 2007, 『平成19年版食育白書』社団法人時事画報社。
- 内閣総理大臣官房広報室編, 1990, 『家庭教育に関する世論調査』大蔵省印刷局。
- 長澤由喜子・小笠原洋子, 1992, 「新設『家庭生活』領域に関する一考察——中学生の家庭生活意識を視点として」『岩手大学教育学部附属教育実践研究指導セン

- ター研究紀要』2: 75-85.
- 平井滋野・岡本祐子, 2005, 「小学生の父親および母親との心理的結合性と家庭における食事場面の諸要因の関連」『日本家政学会誌』56 (4) : 273-282.
- 平井滋野・岡本祐子, 2006, 「家庭における過去の食事場面と大学生の父親および母親との心理的結合性の関連」『日本家政学会誌』57 (2) : 71-79.
- 本田由紀, 2008, 『「家庭教育」の隘路——子育てに強迫される母親たち』勁草書房.
- 松島悦子, 2001, 『中高生の食生活と料理』東京ガス都市生活研究所.
- , 2006, 「男性料理人口が、初めて半数を超えた! (生活定点観測調査2005より)」東京ガス都市生活研究所ホームページ都市研コラム (<http://blog.tokyo-gas.co.jp/toshiken/2006/07/post-124.html>)
- , 2009, 「発達段階による母親の食育に関する意識の違い」『お茶の水女子大学SHOKUIKUプロジェクト 平成20年度活動報告』お茶の水女子大学SHOKUIKUプロジェクト, 45-47.
- 山口静枝・春木敏・原田昭子, 1996, 「母親の食行動パターンと幼児の食教育との関連」『栄養学雑誌』54 (2) : 87-96.

まつしま・えつこ お茶の水女子大学・横浜国立大学非常勤講師。主な論文に「友人との共食による育児サポート効果——乳幼児を持つ専業主婦を対象として」(『日本家政学会誌』57 (6), 2006)。家族社会学・消費者科学・食生活学専攻。(matsushima.etsuko@ocha.ac.jp)